

気まぐれ 本気で
女神にキャラメイク
されました

I WAS SERIOUSLY MADE A CHARACTER MAKE-UP
BY THE CAPRICIOUS GODDESS.



ハチミツ
HACHIMITSU

MAIN CHARACTERS
登場人物紹介

カローナ →

カンナを
美少女に作り上げた、
気まぐれな女神様。

リッカ

カンナと行動を共にする、
Cランクハンターの獣人少女。

カンナ

女神様によって転生させられ
異世界を旅することになった、
元「普通」の会社員。

エレナ

ミリアの腹心の部下。
お茶を入れるのが得意。

ドンちゃん

カンナによって魔法で
生み出されたドラゴン。

ミリア・イズリス

グリム王国の王女。
カンナをお姉様と呼び慕う。

**アステイー・
アルバリウス**

王国最強と名高い、
唯一のSランクハンター。

1 波乱の予感

目が覚めると真つ暗な空間に座らされていた私、カンナ。
目の前にいた銀髪美女、女神カローナさんによると、私は会社の後輩に刺されて死んでしまったらしい。

どうやら転生させられるようなのだが、ここでカローナさんがある『お願い事』をしてきた。その内容は、記憶を持ったまま転生させる代わりに、彼女の分身体を連れて行ってほしいというもの。この真つ暗な空間にずっと引きこもっていた彼女は、直接世界を見て回りたいというのだ。前世で叶えられなかった『普通の幸せを手に入れる』という目的を果たすため、私はカローナさんの願いを聞き入れ、早速異世界に転生するのだった。

しかし実際に転生してみると、私の容姿はカローナさんそっくりの超絶美少女になっていた。しかも能力も彼女のをコピーしたため、とんでもない魔力やカリスマ性を手に入れた反面、身体能力が引きこもりのソレになってしまっている。加えてカローナさんの分身体は、光る玉というシュールなものに。

「これで普通の生活を送れるのか」と不安に思いつつ、とりあえず近隣の町セルフィアに辿り着い

た私とカローナさん。フリド防具店で雇ってもらい、しばらくは平和に過ごしていたのだが、商業組合とのトラブルのせいで店に迷惑をかけてしまったため、町を出ることを決意する。

追っ手を追い払うために召喚したドラゴンが、偶然近くを通りかかった王族の馬車を襲ってしまったたり、そのドラゴンと戦うはめになったりと、町を出てもトラブルに巻き込まれてしまう。

なんとか王都グリーディアに辿り着いた私たちは、街中で出会った狼獣人のリツカとともに、高位ハンター養成学校に入学したのだった。

Cランクハンターが数多く在籍するこの学校では、高位ハンターとして様々な特権が与えられるBランクへと昇級するために、それぞれが日夜研鑽を重ねている……まあ、私はハンター登録したばかりなのでCランクではなく、一番下のHランクなのだが。

在籍者たちには三カ月に一度、年に四回の卒業試験の機会が与えられる。目の前に用意された高位ハンターとしての立場をもぎ取るために、みんな目をぎらつかせて試験に備えていた。

私たちが入学してから三カ月弱、そんな試験の日が間近に迫り、学校内の空気がピリピリし始めたある日のこと。

在籍者の多くが寝泊まりする大きな寮の屋上で、私は日向ぼっこを楽しんでいた。

「はあ……平和ですねえ……」

『そうですね……』

「クアア……」

屋上には簡素な毛布が敷かれてあり、私はその上に体を広げて横たわっている。全身で日光を受け止める私の胸の上には、カローナさんが丸い体をだらしなくたせて寝そべっていた。

私の顔の横では、ドンちゃんが気持ちよさそうに翼を広げている。このドンちゃんは、私が召喚したドラゴンをベースに生み出したものである。魔力でできているため、身体の大きさも自由自在だ。そんな魔力から生まれたドラゴンでも、日光が与える眠気には勝てないようだった。

「はい、じゃあ国内のBランク危険種の名前と生態を、生息地が北のものから順番に説明してください」

「え、えっと……まずはホワイトリザードが……」

「いきなり違います！ 最北端に生息するのはヘルムクラブ！ 全然覚えてないじゃないですか！」

「ご、ごめんなさいっス……」

屋上にはテラス席も設けられていて、この国の王女ミリアがリツカに卒業試験に向けて勉強を教えていた。ミリアは例のドラゴンに襲われた馬車に乗っていたのだが、そのピンチから救った私のことを、お姉様と呼び慕っている。ちなみに、私は同じ時に第二王子オスカーに求婚された。断ったけど。

彼女たちの方から届いてくる声を聞く限り、進捗はあまり芳しくないようだった。

頭のいいミリアに任せてみればなんとかなるかと思っていたが、なかなかどうして、リツカのおバカ具合も大したものである。

『実践は誰より得意なのにねえ……』

「体で覚えてきたタイプなんでしょうね……」

私はカローナさんの言葉に頷きつつ、欠伸を噛み殺しながら、ちらりとリツカの様子を窺った。悩まし気に頭を抱えて、目の前に広げた教科書を凝視している。一生懸命なことだけはとてもよく伝わってきた。

ミリアはそんなリツカの横に立ち、呆れた様子で溜息をついていた。

「せっかく遊びに来てくれたのに……ミリアには苦勞をかけちゃうなあ」

『カンナが早々に匙を投げちゃったからじゃない』

「……リツカに勉強を教えるのは、私には荷が重いです」

『そう？ まあ、バカな子ほど可愛いから、私はこのままでもいいのだけれど』

「それじゃリツカが卒業できせんよ。勉強を頑張るのは学生の義務ですからね」

カローナさんにそう答えて、再び晴れ渡る空に視線を戻した。

王女様直々に勉強を教えてもらえるなど、そうそうあることではないだろう。リツカには今の内に十分堪能してもらいたい。

ミリアに付いてきた護衛たちは、みんな寮や屋上の入り口を警備しており、屋上までは来ない。今ここにいるのは気心の知れた四人と一匹だけ。のんびり羽を伸ばすにはいい機会だった。

『最近は大忙しだったものね。カンナもよく頑張ってたと思うわ』

「ありがとうございます。なかなか不慣れで大変でしたが……」

ハンターとしての勉強や訓練は、私が想像していたよりもよっぽど過酷なものだった。

勉強はともかく、訓練は言わずもがなだろう。私の身体能力は、ずっと引きこもっていたカローナさんに準拠しているため、とんでもなく貧弱になってしまっている。こんな体で野山を走り回ったり、屈強な魔物と戦えたりするわけがない。

『こんな体だなんて。失礼ね』

「逆にどの辺が自慢できる体なんですか？」

『……可愛いじゃない』

「それ以外は？」

『……………』

「ぐうの音も出ないじゃないですか」

可愛いのは同感だが、それは女神が作り上げたものなのだから意味当然だろう。それよりもこの貧弱さと体力のなさが問題なのだ。

沈黙を貫くカローナさんに、なぜかこっちまで申し訳なくなってしまう。

「……まあ、確かに大変でしたけど……楽しかったですよ。ハンターとしての勉強も」

『……そう？』

ここで過ごした約三カ月を振り返りながら、カローナさんに向けてそう呟いた。カローナさんは

不思議そうに声を上げる。

「はい。魔物の種類とか、狩りの仕方とか、ハンターのルールとか……初めて学ぶことばかりで新鮮でしたし、毎日新しいことを覚えていく日々は、とても充実してました」

『……そう。ならよかったわね』

「はい。よかったです」

普段は言わないが、こうして新しい人生を歩めているのも、カローナさんのおかげなのだ。カローナさんが私をこの世界に連れてきてくれなかったら、私の人生はもうとくに、あっけなく終わってしまっていた。

だから、本当はとても感謝している。生きる機会を与えてくれたことにも、こうして一緒にいてくれていることにも。

『……うふふふふつ』

あ、そうか……体に引っ付いてる時は……

『聞こえてるわよ。カンナったら。最高に可愛いわ』

「……やかましいですよ」

そのまま黙っていてくれればよかったのに。

やはり前言撤回だ。感謝などしてやるものか。

熱くなった顔を見られないように、私は細い腕でドンちゃんを持ち上げて、顔の上に乗せた。

『カンナは卒業したらどうするの？』

しばらくして、顔の火照りが取れた頃。カローナさんが何気なく尋ねてきた。

正直、何かしたいことがあるわけではない。しなければならぬこともない。ただ、楽しく毎日を送ればそれでいい。

私の目標は『幸せになること』。だから、生き方を何か一つに縛り付ける必要性は感じていない。逆に言えば、今の私はなんだってできるのだ。だからこそ悩んでしまう。贅沢な悩みだった。

「……本当に、旅行とかしちゃいましょうか」

『世界一周っ!?』

「違います。はしゃがないでください」

元々世界旅行をしたがっていたカローナさんが、一気にテンションを上げる。頭の中に大音量の音が響いて、思わず耳を塞いでしまった。

「……一度ハンターの資格をとれば、王国の所属にはなりますが、一応国外のハンターギルドでも活動はできるですよ。仕事をしながら他の国にも行ってみましょうか、ってことです」

『いい！ いいわねそれ！ 素敵よ！』

「カローナさん、うるさいです」

『……素敵よ』

小さな声で呟くカローナさんを、私は苦笑しながら撫でた。

「じゃあ、まずは卒業試験に合格しないとすね」

私がそう言うと、後ろから声をかけられる。

「残念ながら、今のままではそれは難しいですよ。リッカさんをどうにかしないと……」

そう言いながら、困ったような笑みを浮かべて歩いてきたのはミリアだった。

リッカに視線を向けてみれば、頭から湯気を出してテーブルに突っ伏している。本日何度目かの限界を迎えたようだった。

「あー……やっぱり厳しそう……？」

「……五分と云ったところですね。リッカさん次第ですが、毎日逃げずに勉強すれば、まだ可能性はあるかと」

「そっかあ……」

その言葉に、少しだけ安堵する。リッカは苦手だからといって途中で投げ出すような子ではない。むしろ私のためとなれば、無理をしても頑張ってくれる子だ。

「まあ、逃げようとしても私が逃がしませんよ。だから安心してください」

そう言って、ミリアがにこりと微笑んだ。

……これからリッカは苦労しそうだなあ。試験までの短い間とはいえ、王女にこれだけのプレッシャーをかけられながら勉強を教わるというのは、きっと私なら耐えられないだろう……

「あはは……ありがとうございます。リッカをよろしくね、ミリア」

「はい、お任せください！ お姉様！」

ミリアは顔を赤くして、頼もしい答えを返してくれた。

その様子を微笑ましく眺めていると、急にミリアが真面目な表情を浮かべて、深刻そうな声色で話しだした。

「逃げるといえば、お姉様……一つご報告があるんです」

「報告……？ どうしたの？」

ミリアの様子に、私も体を起こして向き直る。私の体勢が整うのを少しだけ待ってから、ミリアは重々しく口を開いた。

「……アスモ・ガルダーブが、セルフイアの町から逃げ出しました」

「……え？」

ミリアから語られた報告に、私は呆けたように、空虚な声を返した。

2 アスティー・アルバリウス

決しているいい出とは言えない、薄れていた記憶が、私の脳裏に蘇ってきた。

アスモ・ガルダープ。

かつて私を手中に収めようと、私が勤務していたフリド防具店に火を放ち、店主のフリドさんと彼の父クロードさんに多大なる迷惑をかけた男である。私がセルフフィアの町を出て行くきっかけを作った男というわけだ。

商業組合の組合長という地位を利用しながら数々の悪事に手を染めていた彼は、私がセルフフィアを出た後、ミリアの采配^{さいはい}によって捕らえられたと聞いていたのだが……

「どうやら、彼は王族の護衛や、セルフフィアの衛兵たちの中にもコネを持っていたようです。そういった人脈^{そぶ}づくりは上手い男でしたからね」

悔^くしがる素振りも見せず、ミリアが淡々と話を続ける。

ミリアの中では、おそらく予想していたことだったのだろう。自分の部下であれば信用できても、他の護衛や衛兵たちまで全員が潔白^{けつぱく}だとは限らない。初めから、信用も期待もしていなかったのだ。

「そう……随分顔が広いんだね。周到、と言っているのか……」

「卑^{いや}しい方でしたから、むしろ当然の備えだったと思います。まあ、賄賂^{わいろ}として渡すものには困らなかったでしょうし……」

私の言葉に、ミリアが苦笑いを浮かべる。確かに意地汚いあの男であれば、万が一捕まった時に備えて万端の準備をしても不思議ではない。

お金でも、貴重な商品でも、あるいは「人」であっても。ガルダープは相手によって手を替え品

を替えながら、相手の欲につけこんでとことん墮落^{だらく}させ、コントロールするのだろう。

性根の腐った、嫌な男だった。嫌な男だったが……

「……あまり、驚かないんですね？」

「え？ あー……」

ミリアが、私の顔を覗^{のぞ}き込みながらそう言ってきた。

改めて自分の内面に意識を向けてみれば、確かに多少の嫌悪感などはあるものの、そこまで衝撃を受けたというわけではなかった。というか、正直言ってどうでもいいとすら感じていた。

「なんだろ……私にとつては、もう過去のことというか……わざわざ憎み続けるほどの相手でもないかなーと思ってね」

自分の心情を整理しながら、訥々^{とつとつ}と語る。今まで忘れていた人間の話題が急に出てきて、まだ戸惑っているというのが本音だった。

「もちろんフリドさんたちにしたことは許せないけど……今の私は、ちゃんと居場所もあって、結構楽しくやってるし。あいつのことは嫌いではあっても、別にそれだけかな」

ガルダープがまたフリドさんたちに何かをしたというのなら話は別だが、セルフフィアの町から出て行ったのであれば、むしろ喜ばしいことだと思う。これ以上私の知り合いや大事な人たちに関わらないならそれでいい。

「そうですか……やはりお姉様は、お優しい方なのですな」

「ええ？ あはは、そんなことないよ。無駄に疲れたくないだけだつて」

ミリアの言葉を、笑って否定した。

憎み続けるというのは、膨大なエネルギーを消費する行為だと思う。ある意味、愛し続けるよりもよっぽど大変だ。

いつまでも憎み続けるなんてなかなかできることじゃない。日々様々な苦悩に晒される私たちにとって、忘れるというのは万能的な救済策である。そうしないと、人間はすぐに限界を迎えてしまふだろう。一人が抱えていられる感情のキャパシティなんて、それほど大きなものじゃない。

だから、人の怒りは風化していくのだ。許すわけではない。上書きされ、薄れていき、気付けば消えている。そんな程度のもんだ。こだわり続けるのも馬鹿らしい。

『優しいって、要は甘いつてことよね……』

胸の中で、カローナさんが呟いた。その呟きがぐざりと刺さる。

そ、そうか……そういう意味だったか……と、能天気な自分が少しだけ恥ずかしくなった。

「……お姉様がお気になさらないのでしたら、それが一番ですね。少し安心しました」

安堵の笑みを浮かべながら、ミリアはそう言った。

ガルダープに逃げられて、ミリアは真つ先に私の心境を氣にくれたのだろう。感謝の思いを込めて、彼女の頭を軽く撫でた。

「……あ、でも逃げられちゃったのは大変だよ。何か手伝えることがあれば、なんでも協力する

よ？」

「いえ、大丈夫ですよ。卒業試験が近くて、お姉様も大変でしょうし……」

ミリアはそこで一度言葉を切ると、何かを思い出すように視線を屋上の外へと向けた。

「それに、すぐに解決すると思いますよ。王国最強のハンターが働いてくれるそうですから」

遙か遠くを見つめながら、につこりと笑う。

その綺麗な笑みの裏で何を考えているのか、私には分からない。だが、私から視線を逸らして笑うミリアの姿が、なぜだかとても寂しそうに見えた。



「ハアッ……ハアッ……くそ、なんでこんなことに……」

セルフィアの町から遠く南へと離れた、とある荒野にて。

セルフィアから逃げ出したアスモ・ガルダープが、必死になって荷馬車を走らせていた。

商業組合のトップに君臨していた彼だが、その昔は一介の商人として、国内外を問わず広く走り回ったものである。地図などなくても、だいたいの地形は頭に入っていた。

「とにかく、早く逃げなければ……隠しておいた財産は持ち出せた。やり直して、必ずまた戻ってきてやるぞ……」

復讐心^{ふくしゅうしん}を胸に抱きながら、彼は懸命に荷馬車を走らせる。

肥えてたるんだお腹の肉が、荷馬車の揺れに合わせてタプタプと踊っていた。

「まずはソドムの町に身を隠そう……それから、そうだな……帝国にでも行くか。あそこなら商売がやりやすい」

人気の無い荒野を進みながら、一人今後の計画を立てていく。

時刻はもうすぐ夕暮れ時である。まだ日が昇る前の早朝に町を脱出して、それからひたすら逃げ続けている。流石に限界が近かった。

「くそっ……！ 全部、ミリアとかいう女のせいだっ！ 無能な王族が、くだらない正義感をふりかざしおって……」

彼を捕まえたのはエレナという女性だ。だが、エレナの主人であり、逮捕状^{たいほじょう}にサインをしていたのが、ミリア・イズリスという王族の娘だった。

その時点で言い逃れることは無理だと悟った彼は、大人しく捕まり、そして逃げ出すチャンスを待った。ミリアさえセルフピアから出て行ってしまうえば、その機会はいくらでも作ることができるのだ。

「必ず復讐してやるぞ……そしてカンナ……待っている、お前は絶対に私のものに……ん？」

ガルダープは息を荒くしながら、二人の少女を脳内で好き勝手にいたぶっていく。苦痛に泣き喚^{わめ}き、許してくれと哀願する姿を想像していると、進行方向の先に誰かが立っていることに気付いた。

「あれは……女か？」

騎士のような鎧^{よろい}を身に纏い、腰には立派な剣を佩^はいている。

氷のような、透明感のある長い水色の髪の毛が、風に靡^{なび}いてバサバサと揺れていた。

鋭い眼つきでこちらを見据^{みす}えており、口元には不敵な笑みを浮かべている。その口が、「み・つ・け・た」と小さく動いたように見えた。

「なぜこんな場所に……しかも、もうすぐ日が暮れるというのに……」

セルフピアからの追手かとも思ったが、それなら一人ということはないだろう。それに後ろから追ってくるのではなく、向かう先で待ち構えているというのもおかしい話だ。ここまで全速力で馬を走らせていたのだから。

そもそも、ガルダープはあえて人のいない道を選んで走っていた。彼がこのルートで逃げるなど、いったい誰が予想できるだろう。

「……まあいい。行けば分かる」

迂回^{うかい}しようかとも思ったが、辺りは荒野で道も整備されていないし、何より女は明確に自分を見据^みえていた。避けて行こうとすれば追ってくるだろう。

女一人であれば、恐れることはない。カンナにやられた時と違って、今は武器も持っている。商人^{たしな}の嗜^{たしな}みとして、護身程度の剣術も学んでいる。

カンナとミリアを自分のものにするまでの間、あの女を代わりに飼うのも悪くはないかもしれない。

そんなことを思いながら、ガルダープは遠くに立つ女の元へ荷馬車を走らせていった。
「……おとおっ……」

女の顔が判別できる距離まで近付くと、ガルダープの丸い顔は喜悦に歪む。

そこに立っていたのは、背が高く、見る者の背筋を凍らせるほどの美貌を持った女性。タイプは違うが、カンナに勝るとも劣らないほどの美しさだった。

「これは、是が非でも……」

自分のものに、という言葉を呑み込みながら、ガルダープはゆつくりと荷馬車の速度を落としていき、女の前で停止させる。

女は目の前で停まった荷馬車を一瞥すると、不快そうな目でガルダープを睨みつけた。

「お前がアスモ・ガルダープだな？」

彼女の声は静かで、冷たく、怜悯な印象をガルダープに与えた。

名前を呼ばれたガルダープは、内心でほくそ笑む。そして鷹揚な態度で返答した。

「失礼、そういう貴方は……」

「汚い声だな。もういい、喋るな」

「……は？」

女あまりに唐突で辛辣な言葉に、ガルダープは一瞬固まってしまった。自分で尋ねておきながら、喋るなどはどういうことか。

そんなガルダープの心境をよそに、女は心底汚いものを見る目を彼に向ける。いや、直視するのも嫌らしく、その焦点はガルダープの周りでふわふわと漂っていた。

「話以上の醜悪さだ……くそっ、ミリアのやつめ……最悪な仕事を寄越してくれたな……」

女はガルダープのことを無視して、一人自分の世界に籠ってしまふ。

突然現れ、侮辱され、最後には無視される。そんな屈辱を受けたガルダープは、思わず声を荒らげてしまっていた。

「貴様ッ！ いきなり出てきて、その態度はなんだ！ 私を……」

「黙れ」

「グッ……ムッ!?」

ガルダープの声を遮って、女が一言声を発する。

その瞬間、女の氷のような目が怪しく光り、ガルダープは口の中に激痛を感じた。

慌てて自分の口元に指をあててみれば、冷たく硬いものが指先にあたる。

数秒遅れて、口の中の水分がすべて凍り付き、唇まで凍ってしまっているのだと気が付いた。

「ンッ……!! ンンン……!?」

舌が上顎に貼り付き、上下の唇同士も貼り付いている。上手く呼吸ができずに、どんどん苦しくなっていた。

座っていられなくなったガルダープは、荷馬車から地面に落下する。無様に地面をのたうち回り

ながら、涙目で必死に鼻息を荒くして、目の前に立つ女を見上げた。

「苦しむ姿も醜いな。まるでムカデが蠢いているようだ」

女は不快そうにガルダープを見下ろして、すぐに視線を逸らしてしまう。

それでもう、助けを求めるガルダープの目に、女が気付くことはなくなった。

「ンン！　ンンン——ッ！」

貼り付いた唇を必死になって剥がそうと、ガルダープは自分の唇を乱暴に掴む。しかし途端に刺すような痛みを感じて、咄嗟に唇から手を離れた。

見れば、一瞬掴んだだけで、指先が凍ってしまっている。少しでも離すのが遅れていれば、指は唇に貼り付いて取れなくなっていただろう。

「さて、さつさと終わらせるとしよう。お前みたいな醜いやつに時間をとられたくないんだ」

女は冷酷な目でガルダープ……の周りを見下ろしながら、淡々とそう告げた。

苦しむガルダープも、彼女からしてみればただの汚物でしかないのだろう。そう確信させるほど、なんの配慮や頓着も感じさせない無感情な声だった。

「お前の罪状は……まあ、色々聞いているが、どうでもいいか。醜かったというだけで十分だ」
女の言葉を聞いて、ガルダープが怒りに震える。

確かに自分は悪いことをしてきたが、それにしたって、この仕打ちはないだろう。こんなどうでもよさげに、そこらのゴミを片付けるように扱われるなど、耐え難い屈辱である。

このアスモ・ガルダープ様を舐めるなど、声を大にして叫びたかった。

しかし彼の心からの叫びは、凍り付いた唇によって、言葉にすることはできなかった。

「ミリア・イズリス王女からの依頼により、お前を始末する。さあ、この世に別れを告げ、女神に祈りを捧げろ」

ミリア・イズリスという名前が耳に届いた瞬間、ガルダープの怒りは明確な殺意となった。

ガバツと体を起こすと、荷馬車の御者台近くに置いていた剣を手に取り、勢いよく引き抜く。

「ンン——！」

そして全力で振り上げ、女に向かって振り下ろす。

それは一瞬の出来事。その巨体からは想像もできない機敏な動きで、ガルダープは女を攻撃した。
「……はあ……死に際から急に動き出すあたりも、まさに虫ケラそっくりだな……」

しかしその攻撃が、女に届くことはなかった。

「ン……ブフッ……」

ガルダープの唇の端から、細く血の線が滴り落ちる。吐き出されなかった血液は、口の中や喉の奥で凍り付き、彼の氣道を完全に塞いでしまった。

そんなガルダープの体には、地面から伸びた何本もの氷柱が突き刺さっている。両腕はおろか両足まで綺麗に切り飛ばされ、自分の足で立ててすらいない。前後左右から体を貫く氷柱に、全体重を支えられていた。

「醜いお前にはもつたいない最後だな。喜んでいいぞ。私に殺されるんだからな」

女はニヤリと笑って、血だらけのガルダープにそう告げる。

流れ出た端から凍っていく鮮血は、幾本もの氷柱を鮮やかな紅に染めていった。

「ああ……まだ名乗っていなかったか……」

女は思い出したように軽く手を叩く。そして胸元から水晶のように美しいハンタープレートを取り出すと、綺麗に研磨されたチェーン部分に小さな頭を通し、誇らしげな様子で首に提げた。

「Sランクハンター、アステイー・アルバリウスだ。この名を胸に刻み、感謝しながら死ね」

アステイーは不敵に笑いながら、堂々と名乗りを上げる。

しかし残念ながらその言葉は、既に瀕死のガルダープに届いてはいなかった。

冷気が傷口から徐々に全身に回り、氷が体を包んでいく。

呼吸をすることも、喉を鳴らすことさえ許されないガルダープは、ただ黙って苦悶の表情を浮かべることしかできない。

やがて全身が氷に包まれ、ガルダープは身動き一つ取れなくなった。

「散れ」

アステイーの言葉とともに、氷が豪快な音を立てて粉々に砕け散る。

砕けた氷は地面に落下する前に消えていき、やがてそこには氷どころか、ガルダープの死体の一片すら残っていなかった。

一仕事終えたアステイーは、荷馬車に腰掛けて、一人空を見上げていた。

「まったく、ミリアめ……あんな雑魚の始末のためにわざわざ私を呼び戻すとは……次はいつたい何を企んでいるんだか……」

体を後ろに倒し、コッソ、と音を鳴らして、頭を大量の荷物に寄りかからせる。

荷物の中身はガルダープが所持し、持ち運んでいた財産である。いくつもの大きな袋に、溢れそうなほど詰め込まれた金貨や宝石。換金用と思しき金塊や、大量の食糧、調味料まで載せられている。

「ふむ……このまま回収してミリアに渡しても、王族や貴族どもの私腹を肥やすだけだな……ガーディ！」

アステイーが声を発すると、青く輝く魔法陣が地面に描かれ、その中央から三匹の巨大な狼が現れた。

毛並みは雪のように白く、凛とした瞳は主人の髪色と同じ水色だ。

「旅の途中に、みすばらしい村が三つあったろう。三等分して持っていけ。ついでに、もつと村を美しくしろと伝えてこい」

アステイーの言葉に、三匹の狼は金貨や宝石を袋ごと呑み込むと、そのまま風を裂くような速度で走り去ってしまった。

アステイーはそれを見届けた後、馬車に繋がれていた馬の手綱を解いてやる。
しかし自由になったはずの二頭の馬は、アステイーの側から離れようとしなかった。

「……ん？　なんだ？　一緒に来たいのか？」

馬の目を見つめながら、アステイーが困ったように尋ねる。

二頭の馬はアステイーをじっと見つめ、やがて甘えるようにその身を寄せてきた。

「……困ったな。私には既に足があるんだが……」

顎に片手を置いて、うーむと唸っていたアステイーは、馬の首を撫でると小さく溜息をついた。

「仕方ない……おい、フローズ！　私はこいつらと帰るから、お前は先に王都へ戻っている！　間違っても、勝手に暴れたりするんじゃないぞ！」

アステイーが大声を張り上げる。すると遙か上空から、巨大な何かが降ってきた。

「ほら、これを持っていけ。私の使役している魔物だと分かる」

自らのハンタープレートを首からとり、上空へ放り投げるアステイー。

それを立派な角に引っ掛けて受け取ったのは、巨大なドラゴンだった。

全長十五メートルはありそうな、恐ろしく巨大なドラゴン。カンナが魔力で作ったような可愛らしいものではなく、禍々しい存在感を放つ、間違いなく最強の魔物である。

フロスト・ドラゴンと呼ばれるその魔物は、アステイーがこの旅の途中で見つけ、飼いならした新しいペットだ。

ドラゴンは恭しく頭を下げると、大きな翼を力強く動かして、王都へ向かって飛んでいった。

「さて……お前たちも行くぞ。こんなところで一泊したくないからな」

アステイーは馬車に積んであった鞍を取り付け、馬に跨る。

手綱を握ると、馬は彼女の言葉を正確に理解したように、足早に王都へ向かって駆け出した。

「私の旅を中断させてまで呼び戻したんだ……どんな話が聞けるか、楽しみにしているぞ……ミリア」

馬を走らせながら、アステイーはそう呟いた。

陽はさらに傾き、荒野は綺麗なオレンジ色に染まっている。

西日が照らすアステイーの顔は、実に楽しそうに笑っていた。

3 夜の勉強会

高位ハンター養成学校の卒業試験を翌日に控えた日の夜。

私、カンナは赤いインクをつけたペンを右手に持ち、ところせましと解答が書き込まれた用紙に目を通していた。

私の隣では、リツカが緊張した様子でこちらを見つめている。

私の手元にある用紙——ミリアが用意した模擬テストの結果が出るのを、まるで祈るような顔で待っているのだ。

「そういえば……」

解答用紙に視線を向けたまま、私はリツカに話しかけた。リツカの肩がビクッと跳ねる。

「な、なんスか……?」

「あはは、緊張しすぎだよ……あのさ、アステイー・アルバリウスさんって、どんな人か知ってる?」

王国内で唯一のSランクハンター、アステイー・アルバリウス。

私が初めてその名前を聞いたのは、王都に到着した日。リツカとともにこの学校へ向かっている最中だった。

リツカから教えてもらったその名前を聞いて、私は理由も分からないまま、不吉な予感を覚えたものだ。

「アステイー様っスか? もちろん知ってるっスよ。有名な人っスから」

「有名なんだ……いや、それはそうか。唯一のSランクだもんね」

うんうんと私が頷いていると、リツカは不思議そうな顔で尋ねてきた。

「それもそうっスけど……それ以外でも、かなり有名な人っスよ。カンナさんは知らないんスか?」

「あ、ああ……うん。ちよつとその、そういうのに疎^とくて……」

この世界に来て、一応それなりに知識は詰め込んできたつもりだった。それでも、やはりそれは生活の中で必要になってくる知識が多い。そのためこの世界では知ってて当たり前の、ごく一般的な事柄が、たまにポロツと抜けていたりする。

「そうなんスね……アステイー様はとにかくすごい人っスよ! 自分くらいの歳の頃にはもうとくにSランクになって、この学校の最高権力者になってたって話っス」

その言葉に驚いて、私は勢いよく解答用紙からリツカの顔へと視線を動かした。

「ええ!? そんな子どもの頃から、ずっと最強のハンターだったってこと!？」

「そうっスよ。しかも、当時Sランクだった何人かのハンターをボコボコにして、無理やりAランクに降格させた挙句、その日のうちに自分をSランクハンターとして認めさせたらしいっス」

「む、無茶苦茶な人だなあ……」

開いた口が塞がらないとはまさにこのことだろう。呆れと驚きで、私は馬鹿みたいに口を開いて固まっていた。

そんな私に向かって、リツカは楽しそうに言葉が続ける。

「そんな人っスから、当然他の国とかからも誘いがあるらしいんスけど……全部断ってるらしいっスよ。地位や権力に興味がないみたいっス」

「え……じゃあ、なんでわざわざSランクハンターになったりしたの?」

「えっと……Sランクのハンタープレートが綺麗だったから、らしいっスよ。手に入れたらすぐに

飽きたみたいっすけど」

「何その理由……」

話を聞いてるだけでも、その破天荒さ（はてんかう）というか、型破りの性格が透けて見えてくるようだった。普通を好み、波風を立てるのが嫌いな私には、どうにも理解できそうにない。

「とにかく、美しさ至上主義（じじょうしぎ）というか、綺麗なものに目がないんすよ。ハンターになった理由も、『この世の美しいものを片っ端（しっぽう）から蒐集（しゅうしゅう）したいから』らしいっす」

「そ、そう……」

なるほど、随分とアグレッシブな方（なた）のようだ。

アステイー・アルバリウスは、『美しいもの』などという幅広いものを蒐集している変わり者らしい。ならば、その性格はどうだろうか。

「どういう性格の人なの？」

「性格っすか？ さあ、直接の面識はないので……」

「ああ、それもそっか……」

考えてみれば、リッカも話で聞いただけなのだ。

本人の性格など予想するしかないだろう。

「ただ、ものすごく自己中心的で、自分が欲しいもののためなら手段を一切選ばないらしいっすよ」と思ったら、そうでもなかったようだ。

流石は有名人、ある程度の性格は既に認知されているらしい。

あくまでも聞いた話であり、鵜呑（うの）みにするのは危険だが、エピソードを聞く限りは私もなんとなくそんな人（ひと）のような気がした。

「自己中心的、かあ……」

「はい。でも、国民からの人気はすごいっすね」

「え？ そうなの？」

リッカの言葉が意外で、私は首（かし）を傾（か）げた。

好き勝手にやっているイメージだったのだが、そうではないのだろうか。

「はい……詳しくは知らないっすけど、色々と特権を認めてもらってる代わりに、王国から依頼を受けて悪者退治（あくものたいぢ）をしてるらしいっす。有名な盗賊団とか、時には凶悪な魔物（まぶつ）と一人で戦ったりして……いわゆる、『英雄』ってやつっすね。本人は正義の味方のつもりはなくても、助けられた人も多いから、みんな懂（わ）れてるんすよ」

「なるほど……」

好き勝手にやってはいても、それで助けられてる人も大勢いるということか。なら、それほど悪い人（ひと）というわけではないのだろうか……

「ところで、なんで急にそんなこと聞いてきたんすか？」

そう尋ねられ、私は思索（しそく）に耽（ふ）っていた頭（かぶ）を再起動させる。



リツカは不思議そうな顔でこちらを見つめている。私はなんと話したのかと悩みながらも、ゆっくりと口を開いた。

「んー……明日、そのアスティーさんが試験を見にくるって聞いたからさ……」

「ええ!? あ、あ、アスティー様がつスカ!?」

リツカが一気に興奮し、顔を赤く染める。なんだ、「他の人はそうらしい」みたいに話していたくせに、ちゃっかり自分もファンなんじゃないか。

はしゃぐリツカが憧れのヒーローに会えると喜ぶ子どものようで、私は微笑ましさについ笑ってしまった。

「嬉しいだね、リツカ?」

「そりゃあ嬉しいっすよ! 初めてアスティー様を生で見れるんスから!」

「初めて? 珍しいの?」

「珍しいというか、アスティー様は何年か前から国外へ旅に出ていたはずなんスよ! 理由は分からないんスけど……旅は終わったんスカね? とにかく、戻ってきてくれて嬉しいっす!」

「あはは、よかったねえ」

パタパタと忙しなく尻尾を動かし、早口で喋るリツカを宥めるように、優しく頭を撫でる。しばらく撫で続けていると、興奮していたリツカも次第に落ち着いてきた。

「はああ……明日が楽しみっす……なんか、一気にやる気が出てきたっすよ!」

「そう？　じゃあ、その調子で勉強も頑張つて。ここここ、間違ひ。やり直し」

「え……」

チェックをつけた解答用紙を差し出すと、リツカは笑顔のまま固まってしまふ。段々と笑顔が萎しぼんでいき、やがて拗すねた子どものような顔になった。

「……やる気、ちよつとなくなつたっす。一回休憩きゅうけいを……」

「筆記で落ちたら、その後の実技でアスティーさんに会えなくなるかもね？」

「……うわああああああ！」

「頑張れー」

頭を抱えて机に突つ伏すリツカに向かって、応援の言葉と新しい用紙を送る。

勉強はとにかく反復して覚えろというミリアの厳しいお言葉のもと、私も心を鬼にしてリツカの勉強を監督する。

再びペンを握り、唸りながら問題用紙を睨みつけ始めたリツカを見ながら、私はミリアのことを思い出す。

アスティー・アルバリウスが卒業試験を見にくる。それを教えてくれたのはミリアだった。

単なる世間話だった可能性も十分にある。だが、その時のミリアの顔は、どこか含みがあったというか、作り物めいていた。

なぜミリアは、アスティーのことを私に教えてくれたのか。

一応、用心はしておくべきだろう。それが杞憂きゆうで終わるなら、それはそれで構わない。

まだ会ったこともない王国最強のハンターについてあれこれと想像しながら、私はリツカが問題を解き終わるのを静かに待ち続けた。



すっかり陽の陰は消え、王都に夜の帳とほりが下りた。

僅かに残っていた活気も、次第に沈下しつつある。

王都の中心にそびえる王城も例外ではなく、立派な城門の中は暗闇と静寂に包まれていた。

そんな王城の中の、とある一室。

王女ミリアの部屋としてあてがわれた小さな部屋は、いまだ華やかな明るさを保っていた。

そしてそのミリアの部屋を指して、薄暗い廊下を一人の女性が颯爽さつそうと歩いていく。薄暗いといつても、もちろん最低限の灯りは確保されているし、今夜は月も綺麗に輝いていた。歩くのに困るほどの暗闇にはならない。

月光を受けて、女性の優麗な面差しが暗がりの中に照らし出される。

酷薄こくはくな笑みを浮かべながら、その女性——アスティー・アルバリウスは誰憚だれはばかることなく、堂々とした足取りでミリアの部屋へと向かっていた。

彼女は誰の許可も取らずに王城に踏み入っているが、衛兵たちは止めようとしなない。既にミリアの部下から話は聞いているし、何より止めようとしたところで、自分たちでは一秒の足止めにすらならないと理解しているのだ。

あらゆる魔法を使いこなし、国の誰よりも剣の腕に優れ、深い叡智^{えいち}を有している。あげつらう欠点のない完璧な彼女を、人々は『英雄』と呼び崇めていた。

「……………ふっ」

そんな英雄は、やがてミリアの部屋に辿り着く。

アステイーが予想していた通り、ミリアの部屋からは灯りが漏れている。淡い紅茶の香りまで漂ってきた。

こんな夜遅くに、万端の備えをして自分を迎えるミリアのことを、アステイーは『らしい』と思う。そしてつい、軽く笑ってしまった。

「入るぞ」

そう一言告げると、歩いてきた足を止めることなく、ノックの一つすらしないで、王女の部屋の扉を乱暴に開けた。王族に対してあまりにも失礼な態度だが、アステイーは気にすることなく部屋の中へと足を踏み入れる。

「こんばんは。お待ちしておりました、アステイー様」

部屋の中では、王女らしいきらびやかな衣服に身を包んだミリアが、アステイーに向かって頭を

下げていた。アステイーの趣味に合う華やかな衣装だ。

ミリアの横には小さなテーブルがあり、それを挟んで二つの白いソファアが置かれている。テーブルの上には、ティーポットと二つのティーカップ、そして使用人を呼ぶための小さなベルが置いてあった。

ティーカップには既に紅茶が注がれている。湯気が上つているところを見ると、まだ淹^ひれられたばかりだろう。先に注がれているなど本来ならあり得ないことだが、せっかちな自分への彼女らしい気遣いだろうとアステイーは思った。

「久しぶりだな、ミリア」

「はい。ご無沙汰しています、アステイー様。お変わりないようですね」

「お前は少し成長したな。私の見立て通り、綺麗に育ったじゃないか」

「お恥ずかしいです、アステイー様。アステイー様の美しさには遠く及びません」

アステイーは会話をしながらミリアの横を通り過ぎ、自然と上座に腰を下ろす。ミリアもそれを当然のように受け流し、入り口に近い下座に座った。

どかっと背もたれに体を預け、横柄な態度で足を組む。そんなアステイーを、ミリアは一ミリも動かない笑顔で見つめていた。

「私の騎乗する魔物が先に来たはずだ。どうしている？」

ミリアに向かって問いかける。ミリアはアステイーが動くまで、紅茶に口をつけようと、また

勧めようとしなかった。

「私の部下がお世話をしています。ドラゴンなど初めて見たと、興奮していましたよ」

「そうか。変に刺激したりするなど伝えておいてくれ。殺されても知らんぞ」

「承知しました。優秀な子ですから、心得ているとは思いますが」

「どうだな」

手で口元を抑えてクスクスと笑う。そんなミリアの態度にアステイーは胡散臭^{うさんくさ}そうな目を向けた後、温かい紅茶に口をつけた。

「ん……美味しいな。東国の茶葉か」

「流石、お詳しいですね。少し縁があつて、丁度この前贈っていただいたところでして。そのドラゴンの世話をした部下が淹れてくれたお茶ですよ」

「……そうか」

基本的に自分の目で見たものしか信じていないアステイーだが、その紅茶の味に少しだけミリアの部下への評価が上がる。

しばらくの間、二人は黙って美味しいお茶を堪能した。

「……旅はどうでしたか？」

ミリアがそう尋ねながら、音を立てないようにカップをソーサーへと置く。

アステイーは紅茶を飲み干すと、深い溜息について答えた。

「分かつて聞いているだろう？ お前に呼び戻されていなければ、私は戻ってきてはいない」

「探し物は見つかっていませんか」

「残念ながらも。道中はなかなか楽しいこともあったが、収穫はゼロだ」

そう言いながら、アステイーは頭をソファアの背もたれに乗せ、視線を上へと向けた。細かな意匠^{しやう}の天井が、アステイーの目を和ませる。

「そうですか……ですが、無理もないかもしれませんね。探し物があまりにも希少すぎますから」

「希少、か……確かにそうかもしれないな。諦めるつもりなど毛頭ないが」

「見つからなかったらどうするのですか？」

「さあな。世界中を探し尽くしてから考える」

アステイーはそう言つて、ミリアが入れたおかわりの紅茶を、少しだけ口に含む。香りを楽しんでから、ゆっくりと息を吐き出した。

「だから、時間が惜しいんだ。単刀直入に聞けど。わざわざ私を呼び戻した理由はなんだ？」

カップを置き、体を起こして、ミリアの目を見つめる。

本題を切り出したアステイーのことを、ミリアは変わらぬ微笑みでもって受け止めた。

「目的、ですか？ 手紙でお伝えした通り、セルフィアから逃げ出したアスモ・ガルダープの処分を……」

「くだらない嘘を吐くな、ミリア」

語気とともに、アステイーの目に力が入る。

常人ならば否応なく震え上がるような目で睨まれても、ミリアの表情に変化はない。分厚い仮面は少しの揺らぎも見せなかった。

そんなミリアに苛つきながら、アステイーは続ける。

「お前の腹の黒さなど知っている。誰がお前に知識を叩き込んでやったと思ってる？」

アステイーは前屈みになり、両肘を自分の足に乗せた。

「あの程度の雑魚を始末するために、お前が私の手を借りるはずがないだろう。そもそもお前はあの醜い男が逃げ出す前から、私に文を飛ばしていたな？ ご丁寧に逃走に使うだろうルートまで添えて。そして機を見計らってわざと脱獄させた。でなければ、遠く国外にいた私があのタイミングでヤツを見つけられるわけがないからな」

「……………」

アステイーは淡々と語っていく。それはただ事実を述べていつているだけ。証拠がなくても本人は確信しているし、ミリアも否定しない。

それでも、ミリアの笑みは微動だになかった。

「……まあ、あの男の処分に私を使ったのは、まだいい。私が知りたいのはお前の目的だ」

アステイーは微かに纏っていた怒気を散らすと、またゆっくりと背もたれに寄り掛かった。

そして、今度は面白そうにニヤニヤと笑う。

「この世界で、唯一お前の嘘が通用しないのが私だ。だからこそ、昔からお前は私のことを心底嫌っていたな。そんなお前が、どうして今さら私を呼び戻した？ 何か切羽詰まった事情でもあるのか？」

楽しんでるのが透けて見える顔で、アステイーはミリアにそう言った。

それは軽い牽制と挑発で、本気で質問しているわけではない。それを理解しているミリアは、ただ静かに首を横に振った。

「嫌っていたなんて、そんな。多くのことを教えていただいたアステイー様のことを、私は昔からずっと尊敬していますよ」

「それだ。お前は昔から少しも表情を変えようとしな。だから弱いというんだ」

アステイーは軽蔑するような目をミリアに向けるが、ミリアの表情は変わらない。

「お前の言動のすべてがただの『ポーズ』であることは、ずっと昔から知っている。それを私に見られるのが堪らなく嫌だということもな。さあ、答えろ。そんなお前が、なぜ私に会おうとした？ 今なら私を手玉にとれるとも思っていたのか？」

不敵な笑みを浮かべてそう言うアステイーだが、その目だけは一切笑っていない。瞳の奥に怒りを閉じ込め、ミリアの一挙手一投足を観察していた。

ドラゴンすら容易く飼いならす化け物に睨まれながら、それでもミリアは少しも表情を崩さず、病的なまでに作り込まれた笑みのまま口を開いた。

「……本当に、他に目的などありませんよ」

「……………」

アスティーの目がさらに陰しくなる。

小さな部屋に、針を突き立てられたような緊迫感が流れた。

「しいて言えば……たまには、高位ハンター養成学校の卒業試験に顔を出してほしい、とは思いますが」

「……何？」

ミリアの言葉を受けて、アスティーの眉間に皺が寄る。

彼女は形だけは高位ハンター養成学校の最高権力者として収まっているが、その実他のハンターになど興味は一切ない。卒業試験も昔数回見たことがあるだけで、それ以来思い出すこともなかった。

それがなぜ今さら、ミリアはそんなことを言い出したのか。

「……そういえば、アーベンローテが捕まったそうだな」

「はい……とても優秀なお方でしたので、私としても非常に残念でなりません……」

「……ふん」

沈痛な面持ちで、いけしゃあしゃあとのたまうミリアに、興ざめたような態度で返す。

「学校に何かあるのか……お前が見せたいものが。なら、実際に一度見てみた方が早いな」

「まあ、本当ですか？ みなさん、アスティー様に憧れて頑張っていましたから、きっと喜びますよ」

喜色満面の笑みを浮かべて、ミリアは露骨に喜んでみせる。

それがミリアのポーズであり、彼女の予定通りに事が進んでいるのを十分に理解しながら、アスティーは席を立った。

「お前が何を考えているのかは知らんが……なんでもかんでも、自分の思い通りになると思うなよ。自分のことしか考えていないお前では、最後には必ず一人になるだけだ」

「……そう深く考えず、気軽に参加してきてください。もしかしたら、思いがけない所で、『探し物』が見つかるかもしれませんよ」

「……ちつ。どこまで本気なんだかな」

舌打ちをして、踵を返したアスティーは不機嫌そうな表情を浮かべたまま、部屋の扉を開けた。

「おやすみなさい、アスティー様」

「……ああ、おやすみ。ミリア」

彼女は背中からかけられた声に振り向かずには返事をする、そのまま部屋を出て、月明かりに照らされる廊下を歩き始めた。

一人部屋に残ったミリアは、アスティーが去った後もしばらく動かなかった。

固く目をつむり、自分自身の感情を整理していく。

嘘を吐き続けるには、自分をコントロールしなくてはならない。たとえどんなに心が荒れても、痛んでも。

毎朝、毎晩、ミリアは自分の感情を整理し、その上から作り物の『ミリア』で塗り固めるという作業をずっと続けてきた。

……ただ、今日の整理はなかなか時間がかかりそうである。
ズキズキと痛む心の奥で、そんなことを思った。

4 卒業試験開始！

リッカとの夜の勉強会から一夜が明けた次の日。今日は高位ハンター養成学校の卒業試験当日、そして今はその昼休みだ。

私はリッカを連れて教室の一番前まで歩いていくと、貼り出された試験結果の左端から目を通していた。

卒業試験は、午前中に筆記試験、昼食を挟んで、午後に実技試験というスケジュールで行われる。筆記で失敗してしまった者は、残念ながら実技に進むことはできない。

とはいえ、実は筆記試験はそこまで難しいものではない。出題される問題はほとんどが例年通り

で、傾向もだいたい分かる。

それでも毎回四分の一ほどが筆記で落第するのは、おそらくハンターとして育ってきたが故の勉強嫌いが原因だろう。よほど勉強を避けてこない限り、落ちることはないと思うのだが。

まあ、下っ端^{した}ならそれでいいのかもしれないが、仮にも高位ハンターになるのであれば、最低限の知識や心構えは必要というわけだ。私も一から勉強して、今では立派なハンターの一員であると自負している。

「う……受かったああああ!!」

なかなか自分の番号を見つけれないと、突然目の前から耳をつんざくような歓喜の聲が上がり、私は驚いて身を竦^{すく}ませる。

満面の笑みを浮かべるリッカが万歳をして、私に視線を向けていた。

「受かったっすよ！ カンナさん！ 自分受かったっす！」

「そ、そう……おめでとう、リッカ」

苦笑いしながら、リッカの頭を撫でる。声が大きすぎて、少しだけ周囲の視線が痛かった。

『当たり前よ。あれだけ勉強したんだから。あれで落ちてたら、本物のばかよ』

「あっ！ カローナさんひどいっす！」

抗議の声を上げるリッカだが、その口元はだらしなく緩んでしまっていた。

にへら、と幸せオーラを満開にして喜ぶリッカを尻目に、私も結果を確認していった。